

看護学生のストーマ造設疑似体験演習における 生活体験からの学び

西田 三十一*¹ 榎本 麻里*²

Practical training of nursing students through pseudo-life experience of living with a stoma

NISHIDA, Mitoi and ENOMOTO, Mari

要旨

本研究の目的は、本演習によるストーマを造設した患者の生活や心理についての看護学生の学びを明らかにすることである。看護学部2年生81名のストーマおよび装具を装着した疑似生活体験演習後に学びとして記載したワークシートの記述内容を対象とし、質的帰納的に分析した。その結果、課題を課した[生活全般]、[他者にみせる]について、学生の学びとして複数のカテゴリーが抽出された。学生にとって、本演習のストーマ・装具を装着した生活体験は、生活や他者からの否定的反応を受けたことによる不快感や嫌悪感などが積み重なることにより、否定的感情が増幅し、度重なる生活の不自由さを実感した体験であった。これにより、ストーマを造設した患者の心理や生活に伴う苦痛を深く学ぶための多角的視点の育成を促す一助となったと考える。

キーワード

看護学生, ストーマ, 演習, 生活体験

Abstract

The purpose of this study was to elucidate students' learning using practical training, by analyzing their degree of understanding of the life and psychology of ostomates through a pseudo-life experience. An inductive qualitative analysis was performed with the learning experiences described in worksheets by 81 second-year undergraduate nursing students after they experienced a pseudo-life wearing a stoma and brace. In the analysis, multiple categories of learning were identified regarding problems such as "life in general" and "showing others." Through the experience of a pseudo-life with a stoma/brace in this practical training, the students felt that by receiving negative reactions about living from others, feelings of disgust and discomfort gradually accumulated. As these negative emotions amplified, they repeatedly experienced inconveniences in living. This practical training encouraged various perspective and in-depth learning regarding the psychological and daily-life distress faced by ostomates.

Key words

Nursing student, Stoma, Practical training, Experience of life

I はじめに

人工肛門(以下、ストーマとする)とは、手術により腸管を腹部の外側に出して造設した排泄口である。ストーマを造設した患者は、がんに罹患し手術を受けたことに加えて、排泄経路が変わるといった身体機能の変化があり、腹部にストーマが造設されたことや、本来の排便方法で排便できないことへの苦痛がある。ストーマを造設した患者のボディイメージに関する文献を検討した研究では、患者は自己の身体について、拒みたいが拒めない身体、ストーマに縛られる身体、閉ざされる身体等と感じていることが示された¹⁾。患者は、このような心理を抱えながら、ストーマから排便することやストーマを管理する生活に適応できるように、自己の生き方を再構築することが求められる。看護は、ストーマを造設した患者のこれらのような身体

的变化や心理的負担を理解し、患者が生活を再構築し、セルフケア能力を高めて社会に復帰できるように支援することが必要である。

ストーマを造設した患者への看護は、患者の身体的、心理的、社会的側面を理解することが重要である。基礎教育課程の大学2年生は、患者との関わりがまだ少ないため、患者像をイメージすることができるように、学生の理解が深まる授業展開が必要である。そこで、本学の成人看護学援助論Iにおいて、ストーマを造設した患者の生活や心理を理解することを目的として、学生には、模擬ストーマおよび装具を装着および交換する演習を実施している。学生は、ストーマを造設した患者の生活および心理について学びを深めることを目的として、授業内のみならず、それらを装着したまま、約1日の日常生活を体験した。

*1：聖徳大学看護学部看護学科・助教／*2：聖徳大学看護学部看護学科・教授

先行研究では、看護学生を対象にストーマ造設疑似体験の演習を実施し、学生のレポートから学びを分析した幾つかの報告がある^{2)~5)}。これらの中で、学生は、ストーマ造設による日常生活の制約やストーマへの心理的抵抗感^{2)~5)}があったことが示された。また、服の上から手でストーマを押さえていると変に思われるのではないかとといった他者の視線が気になるという記述がみられていた⁵⁾。

ストーマを造設した患者は、他者からの視線を意識しながら生活を送る。さらに、ストーマを造設し、ボディイメージが変化した自己の身体を、家族や医療者等の他者に見せたり説明したりしなければならない場がある。その際、たとえ家族であっても、どう思われるかという不安が生じる。先行研究では、他者からの視線を意識したという学びは示されていたが、他者に意識的にみせる際の患者の心理についての学びは報告されていない。本演習の疑似体験では、生活体験以外に、他者にみせるという課題を課した。これにより、患者の心理について、ボディイメージの変化に伴う不安を、自己の感情を伴う実体験をもとに、より深く主体的に学ぶことを促し、ストーマを造設した患者への具体的な支援を見出す一助となるのではないかと考えた。本研究では、本演習による学生の学びを分析することにより、看護学生のストーマ造設疑似体験演習における生活体験からの学びを明らかにすることを目的とする。

II 目的

本研究の目的は、ストーマ造設疑似体験演習によるストーマを造設した患者の生活や心理についての看護学生の学びを明らかにすることである。

III 研究方法

1. 研究対象

平成28年度A大学看護学部2年生82名を対象に実施した本演習において、学生が生活体験後に学びとして記載したワークシートの記述内容を対象とした。

2. 調査方法

1) 演習内容

成人看護学援助論Iは、2年次秋学期に開講する急性状況下にある患者への看護を学習する授業科目である。本演習は、「ストーマ造設術を受けた患者の看護」の講義(2コマ)後に実施した。学生がストーマ造設術を受けた患者について具体的にイメージできるように、事例を提示した。事例の主体は、「自己」とし、その内容は、「ストーマ造設術後4日目の患者に、術後初めて、ストーマを見てもらいながら装具交換の指導を受ける」ということであった。演習の事前学習として、学生は事例に沿って、ストーマの観察、あなたの気持ち、装具交換の方法、患者

への指導のポイント、声掛けの具体例をワークシートに記載してもらった。講義後の演習前には、自主演習時間を確保した。

演習は、2クラスに分かれて実施し、各演習時間は180分(2コマ)であった。ストーマ造設術を受けた患者の心理状態に沿って、ストーマの観察および患者のセルフケアを促す看護について理解することができることを目的として実施した。学生は、1ベッドにつき2~3名ずつグループとなり、患者、看護師、観察者の役割を担った。5名の教員が各ベッドに配置された学生への個別指導を担当した。各自の事前学習に沿って、自己の腹部に模擬ストーマおよび装具を貼付した。模擬ストーマは、半球のスポンジ(赤色)を半透明のフィルムドレッシング材で固定した。装具は、本演習ではワンピース型の装具(面板、フランジ、パウチが一体になった装具)を使用した(以下、皮膚に直接接着する10cm×10cm程度の面板部分はフランジ、袋部分はパウチとする)。その後、事例の患者の状態を想定して、装具交換の指導を実施しながら装具の交換を実施した。実施後に、各グループでディスカッションを行い、計2回の装具交換およびディスカッションの実施後、各グループの学びを発表した。

演習の最後に、これから、ストーマおよび装具を装着したまま、約1日生活して欲しいこと、その際に生活の基盤の一部である[更衣]、[トイレ]、[入浴]、ボディイメージが変化した患者が他者に身体を見せることによる心理を疑似体験するために[他者に見せる]ことを伝えた。ただし、[他者にみせる]は、学生自身に強い羞恥心が生じる可能性を考慮し、可能な場合に実施することを伝えた。また、搔痒感が出現した際は、早めに装具を剥がして欲しいことを伝えた。学生は、生活体験を通して、気づいたこと、学んだことをワークシートに記載後、提出した。

2) データ収集方法

2年次の本演習が終了し(平成28年11月)、成績が発表されてから約半年が経過した平成29年8月の3年次に全員(82名)が出席している場で、文書に沿って研究の説明を実施した。配布した同意書には、研究協力に同意する学生のみ氏名等を記載してもらい、同意しない場合は白紙で良いことを伝え、全員に研究者から離れた場所にある回収箱に提出してもらった。研究協力への同意が得られたワークシートの記述を対象とした。

3. 分析方法

1) ストーマおよび装具を装着した生活体験を通して学んだワークシートの記述について、[更衣]、[トイレ]、[入浴]など生活行為である[生活全般]についての学びと、意識的に[他者にみせる]ことによる学びについて、それぞれ意味のある一文ごとに抜き出しコード化した。

2) 抽出されたコードを、[生活全般]と[他者にみせる]の各項目に沿って類似する意味内容をまとめて抽象化し、カテゴリーとして抽出し、看護学生のストーマ造設体験演習における生活

体験による学びを示した。全分析過程において、データの信頼性を確保するために、研究者間で繰り返し検討した。

4. 倫理的配慮

研究の概要についての説明書および同意書を配布し、口頭にて説明した。同意する場合のみ同意書に氏名等を記載すること、同意しない場合は白紙で提出すること、研究協力は自由意志にもとづくものであること、同意後であっても撤回できること、協力の有無のよって成績等に何ら影響はないこと、プライバシーの保護、論文発表予定であることについて伝えた。尚、本研究は本学のヒューマンスタディに関する倫理審査委員会の承認を受けた(承認番号H29U029)。

IV 結果

1. 研究対象

研究に同意の得られた看護学生のうち、本研究に該当する生活体験後の学びを記載したワークシートが提出された81名の[生活全般]および[他者にみせる]の学びの記述を対象とした。

2. ストーマおよび装具を装着した生活体験における看護学生の学び

模擬ストーマおよび装具を装着した生活体験における学生の学びとして、[生活全般]、[他者にみせる]の各項目において、抽出されたカテゴリーは以下の通りであった。尚、大カテゴリーは〈〉、中カテゴリーは< >、小カテゴリーは{|}、コードは「」で示す。総コード数は、511であった。

1) [生活全般](表1)

[生活全般]では、〈生活行為に伴うストレスの実感〉、〈皮膚の不快感の体感〉、〈生活の工夫への気づき〉、〈患者の心理的負担の実感〉、〈患者のストレスの具体的な想像〉、〈他者からの視線を意識した否定的感情の生起〉の6大カテゴリーが抽出された。

(1)〈生活行為に伴うストレスの実感〉

〈生活行為に伴うストレスの実感〉は、〈衣服の選択の困難感〉、〈衣服着脱への困難感〉、〈排尿行為に伴う困難感〉、〈装具をつけたまま入浴することによる困惑〉の4つの中カテゴリーから抽出された。

〈衣服の選択の困難感〉では、「自分の好みの服、着たい服を着るのは少し難しいと思った」、「ぴったりした服を着てきてしまったので、目立ってわかってしまったり、圧迫してしまうので、服装も考えなければと感じた」などから{|ぴったりした服を着るとストーマ・装具が目立つ}、{|好みの服を着ることができない}などの小カテゴリーが示され、ストーマ・装具があることおよび便が漏れることへの不安から、普段通りの服を適切に着ることができないことや、外見上目立つことから衣服を選択するこ

との難しさが記述されていた。

〈衣服着脱への困難感〉では、「タイツが十分に上げられないので履きづらい」、「服に引っ掛かってしまうことが何度あったので注意が必要だと思った」などから、{|衣服着脱時に損傷してしまうことへの不安}、{|ストーマ・装具を意識した衣服の着脱に気を遣う}、{|更衣時に周囲に音が漏れることへの気がかり}などの小カテゴリーが示され、ストーマ・装具を損傷しないように更衣することの難しさなどが記述されていた。

〈排尿行為に伴う困難感〉では、「トイレに急いでいても、すぐにパンツを降ろすことができない。取れてしまうのではないかと気にしてしまう」、「トイレの時はパウチを持っていないと邪魔になってしまうので大変だった。パウチを持ちながらだとお尻を拭くのが難しかった」などから{|パウチが便器につかないように排尿することの難しさ}、{|フレンジがあることによる座りにくさ}などの小カテゴリーが示され、衣服の脱ぎ方や排尿後の拭き方などに伴う困難感について、体験から得られた具体的な多くの気づきがあった。

〈装具をつけたまま入浴することによる困惑〉では、「なるべくシャワーが当たらないようにと気にしてしまい、洗うことに集中できない」、「お湯が入ってこないか心配で、取れてこないかと心配」、「便が出るかもしれないため、ゆっくり入る事はできなくて感じた」などから、{|ストーマ・装具を意識して洗うことに集中できない}、{|ストーマ・装具による入浴のしにくさ}などの小カテゴリーが示され、入浴中に実際に様々なことを考え、困惑したことが記述されていた。

(2)〈皮膚の不快感の体感〉

〈皮膚の不快感の体感〉は、〈ストーマ・装具による違和感〉、〈フレンジの皮膚への影響の体感〉の2つの中カテゴリーから抽出された。

〈ストーマ・装具による違和感〉は、「動くたびにツっぱり、動きを制限されている気持ちになった」、「オムツが生理用ナプキンをつけているような気持ちになる」という様々な違和感があったと記述されていた。

〈フレンジの皮膚への影響の体感〉は、{|搔痒感}、{|面板が蒸れるという体感}、{|濡れたパウチが冷たいという体感}などの小カテゴリーから示された。

(3)〈生活の工夫への気づき〉

〈生活の工夫への気づき〉は、〈ストーマを意識した衣服の選択〉、〈ストーマ・装具に配慮した排尿行為の工夫への気づき〉、〈外出時に事前準備する必要性への気づき〉、〈ストーマ・装具に配慮した入浴方法の工夫〉の4つの中カテゴリーから抽出された。

〈ストーマを意識した衣服の選択〉は、「サスペンダーを使った

表1 看護学生のストーマ造設疑似体験演習における生活体験からの学び[生活全般]

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
生活行為に伴うストレスの実感	衣服の選択の困難感	フランチの位置に合わせた服の着方に悩む
		びったりした服を着るとストーマ・装具が目立つ
	衣服着脱への困難感	好みの服を着ることができない
		衣服の選択により便が漏れることへの不安
	生活行為に伴う困難感	衣服着脱時に損傷してしまうことへの不安
		着替えづらい
	排便行為に伴う困難感	ストーマ・装具を意識した衣服の着脱に気を遣う
		ストーマ・装具を意識した衣服の着脱により時間がかかる
	装具をつけたまま入浴することによる困惑	パウチの衣服への収納方法を悩む
		更衣時に周囲に音が漏れることへの気がかり
皮膚の不快感の体感	適切に更衣できているかという不安	
	衣服着脱時に装具がとれないように配慮することの難しさ	
生活の工夫への気づき	パウチが便器につかないように排尿することの難しさ	
	フランチがあることによる座りにくさ	
生活の工夫への気づき	衣服着脱に時間がかかる	
	装具の収納方法を悩む	
生活の工夫への気づき	装具を出すために露出が大きくなり寒い	
	パウチが濡れることへの不安	
生活の工夫への気づき	フランチが剥がれてしまうことへの不安	
	ストーマ・装具を意識して洗うことに集中できない	
生活の工夫への気づき	ストーマ・装具による入浴のしにくさ	
	本当にフランチを貼ったまま入浴してよいのかという不安	
生活の工夫への気づき	ストーマ・装具による違和感	
	痒痒感	
生活の工夫への気づき	フランチの皮膚への影響の体感	
	皮膚感覚の違いの実感	
生活の工夫への気づき	面肌が蒸れるという体感	
	濡れたパウチが冷たいという体感	
生活の工夫への気づき	ストーマを意識した衣服の選択	
	ストーマを意識した衣服の選択への工夫への気づき	
生活の工夫への気づき	ストーマ・装具に配慮した排便行為の工夫への気づき	
	和式と洋式を選択する必要性への気づき	
生活の工夫への気づき	外出時に事前準備する必要性への気づき	
	ストーマ周囲を意識して洗浄する	
生活の工夫への気づき	ストーマ・装具に配慮した入浴方法の工夫	
	入浴時にストーマ周囲を洗浄することによる効率の良さ	
生活の工夫への気づき	浴室でストーマ周囲を洗浄しやすいという思い	
	入浴時に排便がしやすいように食事時間を意識する	
生活の工夫への気づき	フランチを意識した脱衣	
	常にフランチが気になる	
生活の工夫への気づき	周囲の反応が気になることによる疲労感	
	フランチの臭いによる不快感	
生活の工夫への気づき	外したいという強い思い	
	フランチがあることへの苦痛	
生活の工夫への気づき	食事を拒否したくなる気持ちをもつ	
	自己の姿を目にあたりにすることによる不快感	
生活の工夫への気づき	トイレ時にストーマを見なければならぬことへの不快感	
	自己のストーマを目にすることへの嫌悪感	
生活の工夫への気づき	違和感からストーマがあることを自覚させられる	
	違和感から普段とは違うことの実感	
生活の工夫への気づき	自然に排便できないことへの悲しさ	
	排尿時に排便はトイレでできないと感じる違和感	
生活の工夫への気づき	今まであった排便時の感覚がなくなることへの寂しさ	
	排尿時もパウチ内の便が気になることへの気づき	
生活の工夫への気づき	生活を変化させなければならないという体感	
	就寝時に気が休まらないという体感	
生活の工夫への気づき	日常生活への影響を体感	
	ストーマの周囲も洗いたいという欲求	
生活の工夫への気づき	入浴時の不満足感	
	洗浄できないことによる爽快感の不足	
生活の工夫への気づき	フランチを意識した入浴による疲労感	
	便の漏れを想像することによる不安	
生活の工夫への気づき	湯船に中身が濡れないかという不安	
	便破棄を想像することによる不安	
生活の工夫への気づき	排便時のパウチが重くなるという想像による戸惑い	
	臭いの周囲への影響を想像することによる不安	
生活の工夫への気づき	便破棄時の方法の考察	
	便が貯留したパウチは違和感が大きいという想像による不安	
生活の工夫への気づき	排便するかもしれないという焦燥感	
	排便時の暖かさによる不快感	
生活の工夫への気づき	ストーマ・装具により気が休まらない	
	フランチのある日常生活動作の困難感	
生活の工夫への気づき	術後の痛みや傷に伴う不安	
	ストーマをみて自分が病者であることを自覚させられる	
生活の工夫への気づき	家族への負担を想像することによる不安	
	ストーマのある生活が続くことへの嫌悪感	
生活の工夫への気づき	臭いを考えた食生活	
	ストーマを傷つけてしまうのではないかと不安	
生活の工夫への気づき	衣服選択の困難感から気持ちが落ち込むという予測	
	フランチを装着し続けなければならない辛さへの気づき	
生活の工夫への気づき	フランチを外したことによる解放感	
	永遠にフランチを付けなければならない辛さへの気づき	
生活の工夫への気づき	他方からみられることへの嫌悪感	
	公共の場で便が出ることへの不安	
生活の工夫への気づき	外見の変化への否定的感情	
	パウチの音漏れへの不安	
生活の工夫への気づき	周囲の目が気になる	
	共同入浴時の羞恥心への気づき	
生活の工夫への気づき	他者の目線を気にすることによる羞恥心	
	臭いを発することへの不安	
生活の工夫への気づき	便破棄によるトイレ滞在時間の長期化への恥じらい	
	音を発することへの気がかり	
生活の工夫への気づき	入浴の順番への着目	
	家族からの拒否的態度の体験	

りなど工夫するといい]などから「ストーマを意識した衣服の選択への工夫への気づき」などの小カテゴリーが示され、衣服選択の困難さを感じたなど、ストーマのある身体を考えてどのよう

な衣服を選択したらよいか具体的に考えた記述が得られた。

「ストーマ・装具に配慮した排便行為の工夫への気づき」は、「|衣服着脱への工夫への気づき|、|和式と洋式を選択する必要性への気づき|」の小カテゴリーから示された。

「外出時に事前準備する必要性への気づき」は、「旅行などをするときはオストメイト(ストーマを造設した患者)用の(トイレ)を事前に調べておくことが必要だと思った」といった内容が記述され、便が漏れるかもしれない不安を想像した上で実際の生活の仕方について気づきを得ていた。

「ストーマ・装具に配慮した入浴方法の工夫」は、「ストーマ周囲を意識して洗浄する」などの小カテゴリーから示された。

(4) <患者の心理的負担の実感>

<患者の心理的負担の実感>は、「ストーマ・装具の存在による強いストレス」、<自分の姿を直視することによる不快感>、<トイレで排便行為ができないことへの喪失感>、<ストーマを造設することによる生活の変化の実感>、<入浴時の不満足感>の5つの中カテゴリーから抽出された。

「ストーマ・装具があることによる強いストレス」は、「たった何時間かでフランチ嫌だ、早くとりたいたい、恥ずかしいと思った」、 「ストーマ体験した日、昼食が喉を通らず、無意識のうちに食を拒否していた。おなかから便が出てくると思うだけで、食べたくなる気持ちがわかった」といった「周囲の反応が気になることによる疲労感」、 「外したいという強い思い」、 「食事を拒否したくなる気持ちをもつ」などの小カテゴリーから示され、患者の気持ちを疑似体験し、実際に強いストレスを受けたことが記述されていた。

「自分の姿を直視することによる不快感」は、「服を脱ぐたびに目について不快だった。本当に自分が患者になってしまったのかと思った」、「シャワーを浴びる時、ずっと、ストーマ、フランチがある自分の身体が鏡によって目に入って、自分はこんなになってしまったんだという絶望感を感じた」といった浴室などでの脱衣時にストーマのある自己を自覚させられるような不快な気持ちを体感していた。

「トイレで排便行為ができないことへの喪失感」は、「|排尿しているとき、なんで便はトイレで排便できないんだろうと考えた|」、「|模擬の人工肛門だったため、ただついているという認識だったが、本当についている患者さんは排泄したくても排泄できない悔しさや悲しさを感じるのかと思った|」といった「自然に排便できないことへの悲しさ」、 「|今まであった排便時の感覚がなくなることへの寂しさ|」などの小カテゴリーから示され、実際にトイレ体験をしたことから、トイレで排便できないことへの違和感が生じることにより患者の思いを想像していた。また、「尿を出しに行った時もパウチが気になってしまう」という普段の排尿時には感じ得ない感覚を体験していた。

＜ストーマを造設することによる生活の変化の実感＞は、「ストーマひとつで自分の生活を大きく変えていくことになるのだと実感した」、「自転車をこぐのが大変だった」といった「生活を変化させなければならないという体感」などの小カテゴリーから示され、手術をしたことおよびストーマを造設したことにより生活が変化するということを実感していた。

＜入浴時の不満足感＞は、「フランジが気になって、疲れをとるというより、余計に逆に疲れてしまった。入浴はリラックスしたいが、慣れるまで、リラックスできると言えるようになるまでは時間がかかると思った」という「フランジを意識した入浴による疲労感」や、「ストーマの周囲を十分に洗浄できないことによる爽快感の不足」などから示された。

(5)＜患者のストレスの具体的な想像＞

＜患者のストレスの具体的な想像＞は、＜便貯留時の具体的な想像＞、＜生活に伴う負担の具体的な想像＞、＜フランジを装着し続けなければならない辛さへの気づき＞の3つの小カテゴリーから抽出された。

＜便貯留時の具体的な想像＞は、「便の漏れを想像することによる不安」、「排便時のパウチが重くなるという想像による戸惑い」、「臭いの周囲への影響を想像することによる不安」、「排便時の暖かさによる不快感」などの小カテゴリーから示された。

＜生活に伴う負担の具体的な想像＞は、「一日でこんなにも不愉快を感じたため、患者さんはストレスが溜まってしまわないか」、「ストーマをつけていると、いつも何気なく行っている動作を行うことがとても大変に感じ、時間がものすごくかかるなどと思った。いつも時間ギリギリで動いている私にとっては、毎日の生活がとてもせわしなくなるのではないかと思った」、「傷の痛みがあったら、見慣れないものと伴って余計に怖い、不安」といった「ストーマ・装具により気が休まらない」、「ストーマのある生活が続くことへの嫌悪感」、「術後の痛みや傷に伴う不安」、「ストーマを傷つけてしまうのではないかという不安」などの小カテゴリーから示され、多くの生活体験を通して、患者の生活に伴う負担な状況を想像したことが記述されていた。

＜フランジを装着し続けなければならない辛さへの気づき＞は、「やっと(装具を)外せると思い解放感があったけれど、人工肛門患者はまたつけなければならず苦痛が大きいことを感じた」というように「フランジを外したことによる解放感」を実感すると同時に、永久ストーマを造設した患者が、永遠にフランジを装着しなければならない苦痛に自ら気づいたことが記述されていた。

(6)＜他者からの視線を意識した否定的感情の生起＞

＜他者からの視線を意識した否定的感情の生起＞は、＜他者からみられることへの否定的感情＞、＜他者からの見られ方への気がかり＞の2つの小カテゴリーから抽出された。

＜他者からみられることへの否定的感情＞は、「誰か居たら見られたくないからトイレに行って着替えたくなくなった」、「見られないよう服でなるべく隠した」、「電車の中で、フランジがとれて下に落ちてしまったらどうしようなどと何回も考えてしまった」、「しゃがんだりすると、パウチのカサカサというビニール音が、おなかのあたりから鳴るので周囲の目がとても気になった。この音は生活してみないと気づくことができなかった」、「周りに臭いと思われていないか不安に思ったのだから、オナラや便を持ち歩くと考えたら、公共の場になるべく行きたくないと思った」といった様々な記述がみられ、他者からみられることを感じることによる嫌悪感や不安、羞恥心などの否定的感情が生じていることが示された。また、「(学生)寮の大浴場で何人もの人と一緒に入るので、恥ずかしくて入浴前にフランジを外してしまった。私は便が入っている訳ではないけど、とても恥ずかしい、嫌だなど感じたので、実際の患者さんはもっと嫌だと感じると思った」というように、身をもって共同入浴の場に立たされたことによる実体験から、患者はもっと嫌だと感じるという学びを得ていた。

＜他者からの見られ方への気がかり＞は、「公衆トイレでの廃棄は他人がいるため気になると思う」、「排泄物を処理していたら時間がかかってしまい、特に女性はトイレの時間が長いということで恥じらいを感じてしまうと思った」といった「臭いを発することへの不安」、「便破棄によるトイレ滞在時間の長期化への恥じらい」などの小カテゴリーから示された。また、「家族の中で一番最後に入浴して欲しいと言われた」ことから、他者からの見られ方を意識し、入浴の順番が自己も家族も気になるといった気づきがあった。

2) [他者にみせる] (表2)

[他者にみせる]は、実際に他者にみせることを実施した学生は52名、みせなかった学生は29名であった。みせなかった学生のうち、みせる前に搔痒感が生じ外した学生6名および他者にみせることに関する記載がない学生14名を除外した61名の記述を分析の対象とした。他者にみせなかった学生の記述には、みせられなかった思いが学びとして記述されていたため含めた。その結果、[他者にみせる]では、＜他者にみせるという決断の重み＞、＜他者からの反応に揺さぶられた思考＞、＜社会で生活するストーマを造設した患者への理解＞の3つの大カテゴリーが抽出された。

(1)＜他者にみせるという決断の重み＞

＜他者にみせるという決断の重み＞は、＜他者にみせることに伴う感情の動揺＞、＜みせる他者の選択＞の2つのサブカテゴリーから抽出された。

＜他者にみせることに伴う感情の動揺＞は、「初めは抵抗があった。みせるかどうか数分悩んだ」、「好奇の目で見られるので羞恥心」、「他者にみせるまで、勇気というか、気持ちになかなか入ら

なかった」,「理解が乏しい人もいることを思うと怖いと思った」,「人工肛門のことを知られたら、みんな私から離れていっちゃうんじゃないとか、汚いと思われてしまうのではないかなど、色々な気持ちになってみせられなかった」というような他者にみせることに伴う戸惑い、羞恥心、勇気、恐怖といった否定的感情や気持ち揺れ動いた体験が記述されていた。〈みせる他者の選択〉は、「理解してくれている人にみせることができるが、何も知らない人にみせることは出来ないと思った」,「男性には特にみられたくない」というように「何も知らない人にはみせられないという思い」などが生じていた。これらのことから、学生はストーマを他者にみせるという決断の重みを実感していた。

(2)〈他者からの反応に揺さぶられた思考〉

〈他者からの反応に揺さぶられた思考〉は、〈他者からの反応を受ける〉、〈他者からの反応を受けたことによる自己の思い〉、〈他者に理解してもらうことの困難さの実感〉の3つの中カテゴリーから抽出された。

〈他者からの反応を受ける〉は、「(家族が)少しショックを受けたようにみえた」,「両親にみせて母親は看護師なので普通にみていたが、父親は初めてみたので気持ち悪いか、否定的なことを言っていた」,「何これ?どうなっているの?どういうこと?初めてみたという興味津々な(様子の)家族だった」というように、家族をはじめとする他者からの率直な反応を直に受けていた。

〈他者からの反応を受けたことによる自己の思い〉は、「なにこれ?!なんか気持ち悪いんだけど!と爆笑されました。母親だから、率直な意見を言ってくれたんだろうと思い、逆に健常者のストーマを知らない人が見たら、きっと本人の前では言わないものの陰で言われてしまうんだろうなという不安もあって、人にみせたくないという気持ちになった」,「目をそらされたりすると、みせたことへの罪悪感がある」,「偏見の目でみられると思いき緊張したが、想像していたよりあっさりしていて、これ、どうやって使うの?とむしろ興味をもってくれてほっとした」,「みせた時の相手の表情や発言の内容が精神面に大きく影響すると知った」,「友達にみせた時の信じられないという表情は絶対に忘れないと思う。患者さんはこうしたことに何度も遭遇しながら、一生ストーマと生活しなければならぬので、看護師の言葉かけはとても大切だと思った」というような他者からの反応を受けたことにより自己の思考が揺れ動いた記述が得られた。〈他者からの否定的な眼差しを受ける辛さの実感〉や、一方では、〈他者からの肯定的反応への安堵感〉が生じていた。それにより、〈他者の態度が精神面に大きく影響すること〉や〈患者は他者からの衝撃的な反応を受け続ける〉ことに気づき、〈ストーマに愛着がもてる声掛けが必要である〉という学びを得ていた。

〈他者に理解してもらうことの困難さの実感〉は、「理解してもらえそうな人でも、なかなか受け入れてもらえず、言いにくい

ことだと実感した」,「家族にでさえ見られたくないと感じた。今回の演習の説明ですらすらのをためらった」といった「他者に理解してもらえぬ期待を裏切られたことによるショック」などが示され、家族であっても受け入れてもらえないということがあり、という体験が記述されていた。

(3)〈社会で生活するストーマを造設した患者への理解〉

〈社会で生活するストーマを造設した患者への理解〉は、〈体験することによる患者の思いの具体的な想像〉、〈ストーマを造設した患者への社会の理解の実感〉の2つの中カテゴリーから抽出された。

〈体験することによる患者の思いの具体的な想像〉は、「家族にみせた時はとても驚かれて、まだ本当の便が入っているわけではないからそこまで恥ずかしくなかったが、本当に入っていたらみせたくないと思った」,「理解のない人にみせるのは勇気がいる、否定されるのではと不安や緊張といった感情に襲われると思う」,「同情されると悲しくなる、腹が立つのではないか」,「普段の生活の中で、もしかしたら身近に人工肛門をつけている人がいるかもしれないが、本人は誰にも知られたいだろうし、恥ずかしい思いや、人と違うと思ってしまうだろうということ、実際に装着してみたわかった」というように、実際に体験することによって、患者の立場であったらどのような思いになるかということ具体的に想像していた。

〈ストーマを造設した患者への社会の理解の実感〉は、「何それ!気持ち悪いと言われたのでこれがストーマ患者への社会の理解だと思った」,「一般人にもこういう知識がある人が増えれば仕事のときフランチ交換しにくいという思いも減るのではないか」というように、他者にみせたことによって、その反応から

表2 看護学生のストーマ造設疑似体験演習における生活体験からの学び〔他者にみせる〕

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
他者にみせるという決断の重み	他者にみせることに伴う感情の動揺	他者にみせることへの戸惑い 他者にみせることへの羞恥心 他者にみせるための勇気 他者にみせることへの恐怖 他者にみせられない
	みせる他者の選択	何も知らない人にはみせられないという思い みせることができない他者がいるという気づき 他者からの衝撃を受けた反応を受ける 医療者と一般の人との反応の差の実感
他者からの反応に揺さぶられた思考	他者からの反応を受ける	他者から興味津々な様子で質問を受ける 医療者にみせても抵抗感がない 他者とストーマについて話す 他者からの否定的な眼差しを受ける辛さの実感 他者からの否定的反応による否定的感情 他者に理解してもらうことの難しさの実感
	他者からの反応を受けたことによる自己の思い	他者からの肯定的反応への安堵感 他者の態度が精神面に大きく影響する 患者は他者からの衝撃的な反応を受け続ける ストーマに愛着がもてる声掛けが必要である 自分は絶対にストーマを造設したくない 理解してもらえそうな人にもストーマについて言いにくいという実感 他者への説明の難しさの実感 他者に説明することに辛さがあるという実感 他者に理解してもらえぬ期待を裏切られたことによるショック
社会で生活するストーマを造設した患者への理解	体験することによる患者の思いの具体的な想像	他者にみせるのは自己がストーマを受容することが必要であるという実感 本当の患者は気軽に他者にみせられないという思い 患者は他者にみせるための勇気や他者からの反応に対する不安があることへの気づき 体験することによる患者の思いへの気づき 公共施設へ行けない生活への気づき
	ストーマを造設した患者への社会の理解の実感	ストーマを造設した患者への社会の理解の実感

社会のストーマを造設した患者への理解状況を考察していた。

V 考察

1. 看護学生のストーマ造設疑似体験演習における生活体験からの学び

ストーマ造設疑似体験演習において、ストーマ・装具を装着したまま生活することを通して、実際の体験から学生自身の感情や思考に深く働きかけた気づきや学びが記述されていた。

1) [生活全般]について

[生活全般]について、本研究において、生活に伴う困難さや心理的抵抗感などの結果が示された。《生活行為に伴うストレスの実感》では、自己が日常的に実施している生活行為が、思う通りに出来ないことに困難感や困惑を抱いていた。これは、[更衣]、[トイレ]、[入浴]における一連の行動を、衣服の選択や着脱、排尿後に拭く、シャワーの当て方のように1つひとつ小さな行為としてとらえ、ストーマ・装具があることによりこれらの行為がどのように実施できないか、さらには今までのように生活できないことが困難感や困惑といったストレスとなるという具体的な気づきを得ていた。そして、この小さな体験から、《生活の工夫への気づき》というような実際にどのように行為すればよいかという考察があった。看護学生を対象としたストーマ造設疑似体験演習の先行研究においても、ストーマ造設による日常生活の制限や、手技や物品の工夫についての学びが示された²⁾。また、ストーマを造設した患者が生活を再構築するプロセスの1つとして日常生活において生じた困難に対し、生活を再構築するために工夫や調整をしながら対処していることが示されていた⁶⁾。本演習においても、学生は、生活行為における困難を体感したことから、ストーマを造設した患者が直面する生活上の問題への実際の対処方法を考えており、疑似体験ではあるが、生活を再構築していかなければならないことを実感した重要な学びがあったと考えられた。《皮膚の不快感の体感》では、違和感や蒸れるような感覚、入浴によってパウチが濡れることによる冷たさを体験しており、実際に装具類を装着し、生活することによって得られた気づきであったと考える。

また、《患者の心理的負担の実感》では、生活を体験する中で、学生には様々な感情が沸き起こっていた。ストーマ・装具の存在が生活の中で常にストレスとなり続けていることや、自己の変化した外見を目の当たりにすることにより、ストーマを造設した患者が生活の中で幾度もストーマを見なければならぬという気づきがあった。トイレに行く体験により、排便をトイレでできないことへの喪失感を体験し、外見の変化だけではなく、排泄経路の変化に伴うボディイメージの混乱が生じることを実感していた。

《患者のストレスの具体的な想像》では、疑似体験ではあるが、装着している装具から排便することへの焦燥感や排便時に重みや温かみを感じることによる不快感を想像していた。これらから、講義や学内の演習での学びを基盤に、さらに、スト-

マを造設した患者の生活やそれに伴う心理について学びを深めることができたと考える。

《他者からの視線を意識した否定的感情の生起》では、衣服がストーマ・装具により膨らむことによる外見の変化、パウチが音を発することなどから、他者からの視線に敏感に反応していた。ストーマを造設した患者のボディ・イメージに着目した研究では、ストーマを造設した患者は自己の身体を、お腹から便が出るなんて嫌だな、無くして欲しいと拒みたいが拒めない身体、臭うのではないかと、漏れたら大変というストーマに縛られる身体、交換時には目をそらし、情けない、汚い、ストーマを見ると、自分がかんであることを思い出すという脆さを感じさせる身体などととらえていることが報告されていた¹⁾。また、ストーマを造設した患者は、トイレに行ってストーマを見ると自分がかんであることを思い出すといったストーマに対する強い嫌悪感を表現していたことが示されていた⁷⁾。本演習においても、学生は、「公衆トイレでの廃棄は他人がいるため気になると思う」、「自分の身体が鏡によって目に入って、自分はこんなになってしまったんだという絶望感を感じた」と記述しており、実際の患者が感じている苦痛に追従するものであったと考える。

2) [他者にみせる]について

[他者にみせる]は、[生活全般]が自己の生活体験であったことに対して、ストーマを造設した身体を他者にみせなければならぬ状況に遭遇する患者の心理を学ぶために課した課題であり、先行研究には報告されていなかった結果が示された。ストーマを造設した患者は医療者を始め、家族や近い人などにストーマやパウチに貯留した排泄物をみせなければならぬことがある。学生は、他者にみせることは、みせられる他者とみせたくない他者がいることを知り、みせるという行為には勇気があることや、戸惑いや羞恥心、恐怖を抱くといった感情が動揺する体験をし、その決断に至る重みを感じていた。

《他者からの反応に揺さぶられた思考》では、「友達に見せた時の、信じられないといった表情は絶対忘れないと思う」というように、他者からの否定的な眼差しを直接受けることによる辛さを実感していた。本演習では、[生活全般]の体験によって《他者からの視線を意識した否定的感情の生起》が示され、学生は生活の中で他者からの視線を感じとっていた。さらに、[他者にみせる]ことにより、学生は疑似的ではあるが、患者がストーマを造設した身体を他者に説明することの難しさや、勇気をもってみせた他者からの反応を受けたことによる苦痛や安堵感を自分事のように体験していた。これは、他者からの視線を感じとるだけでなく、意識的に他者にみせることによって得られた学びの特徴であると考えられた。

先行研究において、相手の身になることを学ぶために用いた疑似体験としてのストーマ造設は、「排便」という極めて個人的で

あり、羞恥心が関わるものであることが学生の共感性を高め、学生の自分だったらどうかという思考を刺激すると述べられている⁸⁾。本演習により、学生の感情を揺り動かす体験が学生の思考を刺激し、社会で生活するという視点からストーマを造設した患者の心理を察することのできる感受性を養う一助となったのではないかと考える。この経験から学生は、「患者さんはこうしたことに何度も遭遇しながら、一生ストーマと生活しなければならないので、看護師の言葉かけはとても大切だと思った」と考察しており、能動的な学びを促すことができたと考えられた。

また、理解してもらえようと思っていた家族から拒否的な反応を受けたことや、理解してもらえようように説明することの難しさを実感していた。つまり、家族であっても変化した自己の身体を安易に見せることはできないことや、家族も自己の身体を受容するために時間がかかることを察していた。兵藤⁹⁾は、自己の体験から社会との関連性への気づきを促すことは、主体的な学びのために重要であると述べている。本演習においても、学生が他者の反応を体験したことから、≪社会で生活するストーマを造設した患者への理解≫ができたように、ストーマを造設した患者は理解が十分であるとは言い難いこの社会で生活していかなければならない不安をもっているといった社会的課題に、自ら着目することができたと考える。

3)生活体験を通しての学び

学生にとって、本演習は、ストーマ・装具を装着した生活体験による不快感や嫌悪感、他者にみせることによる抵抗感などが積み重なることにより、否定的感情が増幅していく体験であったと考えられた。それにより、「もう嫌だ、早くとりたい」と思うようなストーマ・装具があることによる強いストレスを感じていた。また、フレンジを外したことによる解放感を体験したことから、ストーマを造設した患者がフレンジを装着し続けなければならない辛さへの気づきを学びとして得ることができていた。これは、学生自身の感情が揺さぶられたり、度重なる生活の不自由さを体感した体験から、視野が広がり、ストーマを造設した患者の心理や生活に伴う苦痛を深く学ぶことができたと考えられる。自己をストーマを造設した主体として疑似体験したことから患者を理解するということは、看護師として患者へかわる意志をもち、患者に責任ある応答をする¹⁰⁾姿勢を形成するためにも重要であると考えられる。

トラベルビーは、看護師が援助をするために基本となることは、患者が自分の病気をどう知覚しているかという点について理解を深めることが重要であると述べている¹¹⁾。本演習において、学生は、ストーマを造設した患者の生活や心理について、講義や教科書において学んだ言葉の意味を実際の体験を関連付けながら、実感や体感を伴った学習を通して主体的に学んでいた。これにより、人の心を感じる力を育むことを促し、患者のニーズに沿った関わり

りへの多角的な視点の育成を支援する一助となったと考える。

2. 今後の課題

本研究から演習を通して学生は豊かな学びを得られていたことが明らかになった。これは、他者にみせることを含めた4つの視点を示したことにより、学生が具体的な視点を持ち課題に取り組み、効果的な学習をすることができたためであると考えられる。しかし、各学生によって、体験した刺激による知覚的反応や自己の生活の変化に着目するといった応答的反応⁸⁾のみを記述していた。自己の生活の変化だけでなく、他者との関係や社会的な変化、ストーマ造設患者の立場まで言及するような発展的反応や一般化⁸⁾した記述をした学生もいたが、学生により思考状況が異なっていた。今後は、生活体験後にもディスカッションを実施し、学生同士で学びを深めていく必要がある。

VI 結論

看護学生81名のストーマ造設疑似体験演習における生活体験から、[生活全般]および[他者にみせる]について多くの学びが示された。学生にとって、本演習のストーマ・装具を装着した生活体験は、不快感や嫌悪感などが積み重なることにより、否定的感情が増幅していく体験であったと考えられた。他者に見せることにより、学生自身の感情が揺さぶられたり、度重なる生活の不自由さを体感し、心理的負担を実感した体験から、ストーマを造設した患者の心理や生活に伴う苦痛を深く学ぶことができたと考えられる。

謝辞

本研究にご協力いただきました学生の皆様に心から感謝申し上げます。

文献

- 1) 政岡敦子, 大森美津子, 西村美穂(2015): ストーマを造設した患者のボディ・イメージに関する文献検討, 香川大学看護学雑誌, 19(1), 45-52.
- 2) 有澤舞, 立石和子, 太田美帆他(2017): 装着型ストーマモデルを用いた体験的演習による学生の学び~成人看護学演習レポートの分析~, 東京家政大学研究紀要, 57(2), 35-41.
- 3) 杉崎一美, 小河育恵, 大久保仁司他(2008): 自作模擬ストーマモデルを導入したストーマケア演習における看護学生の学び—ストーマに関するイメージに着目して—, 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要, 4, 9-16.
- 4) 若崎淳子, 谷口敏代(2005): 学内演習における疑似体験学習の効果の検討—ストーマ造設者のケアに関する演習後の学生レポートの分析から, 日本医学看護学教育学会誌, 14, 8-18.
- 5) 橋本裕, 小河育恵(2011): ストーマ造設疑似体験学習を通して学生が得た学び, ヒューマンケア研究学会誌, 2, 30-35.
- 6) 前田恵美, 大石ふみ子, 葉山有香(2012): 骨盤内臓全摘術後に直腸がん患者が生活を再構築していくプロセス, 日本がん看護学会誌, 26(2), 6-16.
- 7) 松原康美, 遠藤恵美子(2005): がんの再発・転移を告知され, 永久的ストーマを造設した患者と看護師で行うナラティブ・アプローチの効果, 日本がん看護学会誌, 19(1), 33-42.
- 8) 荒木玲子(2005): 患者理解のための疑似体験の学習効果とその限界—人工肛門造設患者の疑似体験レポートから, 足利短期大学研究紀要, 25(1), 13-17.
- 9) 兵藤智佳(2016): 第3部第1章「体験の言語化」科目の授業内容, 体験の言語化, 早稲田大学平山都夫記念ボランティアセンター編, 成文堂, 95-114.
- 10) 藤岡完治(2000): 関わる事への意志—教育の根源, 国土社.
- 11) トラベルビー著/長谷川浩, 藤枝知子訳(1974): トラベルビー人間対人間の看護, 医学書院.